

発行日 2008年10月20日(隔月20日発行) 通巻270号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.270

November-December 2008

銃を「持つ」人と 「持たない」人の境界

特集

混迷するアフガニスタンの事例から

<アフガニスタンの民家に向かう米兵を見送る若い兵士。彼はまだ18歳で、ハイスクールを出たばかりだ。 文・写真 田川徹氏>



Japan International Volunteer Center

特集

銃を「持つ」人と 「持たない」人の境界

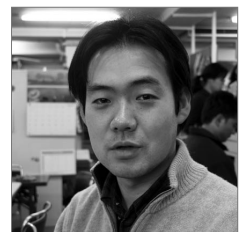
混迷するアフガニスタンの事例から

「対テロ戦争」の最前線のひとつとされているアフガニスタン。アメリカ政府やNATOは今も軍備増強で事態の収拾をはかろうとしているが、先行きは不透明との見方が強い。治安も悪化し、社会インフラも大きく後退してしまったアフガニスタン国内においては、数年前から治安維持と平行して「軍隊による人道支援活動」が実施されている。もちろん人道支援のニーズは存在するのだが、「銃を携える人道主義」の実態とはいかなるものなのか。JVCの活動とともに、現地の米軍に従軍したジャーナリストの声を交えて報告する。(編集部)

誰に目を向けるべきか

アフガニスタン現地代表兼
東京担当

長谷部 貴俊



■プロフィール
国内で外国人労働者支援に関わる。九九年からシャンティ国際ボランティア会で東京およびカンボジア駐在員。〇五年よりJVCに関わり、〇八年一月より現職。日本アフガンNGOネットワーク(JANN)調整員を兼ねる。

■悲しみと怒りの連鎖

今年七月六日、現地のアフガニスタン人スタッフから「今朝、ナシーム医師の親戚が爆撃で亡くなった」という一報を受けました。ナシーム医師とはJVCスタッフであり、JVCが運営するグレイク診療所の所長です。続けて、「その話を聞いて、治療にあたるために彼はすぐに被害に遭った人々の元に向かった」という話を受けました。アフガニスタン東部ナンガルハール県の中心地ジャラバードに我々JVCの事務所はありますが、事件が起こったのは同じ県内の南部でした。村人同士の結婚式が終わって新郎の家に向かう花嫁や女性、子どもたちの列が米軍に空爆されたのです。二十七名が亡くなり、あまりの激しい攻撃で体が発見されない人も十名いたそうです。空爆直後、米軍は「空爆で反政府勢力掃討作戦を行った」と発表しました。事件後、「被害者は反政府勢力でなく、民間人であ

る」とする国際赤十字の現地調査に基づいた報告書が米軍に提出された後も、米軍からは一切の謝罪もありません。日本のある新聞でもこのニュースは取り上げられていましたが、見過ごしてしまうほどの小さな記事でした。

このようなことはアフガニスタンでは日々起こっており、多くの人が亡くなり、その家族には大きな悲しみが降りかかっています。〇五年にも、あるJVCアフガニスタン人スタッフの母親が米軍の誤射で重傷を負い、幸い命を取りとめました。数年間の治療を要しました。この時も、米軍は「よくあることだ」と言うだけでした。

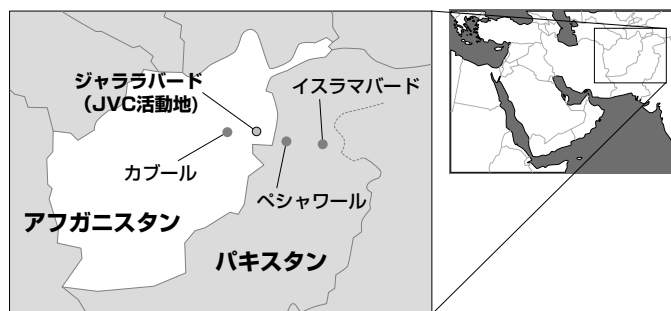
■治安を悪化させ続けてきた「対テロ戦争」

九月に発表されたエンゴウ Rights Watchの報告によれば、アフガニスタンにおける戦闘による民間人死者数は〇六年は少なくとも九百二十九人でしたが、〇七年は千六百三十三人に増加してい

ます。うち九百五十名は反政府勢力によるものとしており一方で、米軍及びNATOの空爆による犠牲者も三百二十一名にのぼり、前年比では約三倍となっています。民間人死者は実際はもっと多い数であろうとも言われています。

〇一〇二年頃には外国軍にもそれほど反発を持っていなかった一般の人々も、今では米軍及びNATOに対して良い感情を持っていません。今年の夏に話したジャラバード市内に住むアフガニスタン人たちが、「昔は感じなかったが今は米軍に反感を持っている。自分たちの政府は外国軍のいいなりだ」と嘆いています。

こうしたことから、警察や軍隊による治安維持に対する住民の信頼はなかなか強まりません。その影響もあってか、タリバーンは勢力を弱くするどころか、カンダハールの刑務所爆撃や相次ぐ自爆テロと、その勢力を増してきています。事務所のある東部ジャラバード市内は比較的安全ですが、



それでも「爆弾を持った車が市内に入った模様だ」、「外国人を狙った誘拐計画がある」という情報を度々聞くので、その都度活動を制限せざるを得ません。

復興はある面では進んでいます。アフガニスタン全体の治安は良くなる兆しが見えませんが、ここで強調したいのは、治安の悪化は今に始まったことでなく、〇三年頃からすでに状況が徐々に悪くなっている、ということ。私自身は初めてアフガニスタンを訪問したのは〇五年七月でしたが、その時期ですでに外国人は市内でさえ自由に歩くことはできず、移動も大変制限されていました。

米軍を含むNATOは現在も兵力増強で治安の改善をねらっていますが、これまでの経過を考えると、軍事による問題解決は明らかに失敗していると言えるでしょう。

■自衛隊派遣の目的は？

JVCは昨年十月、日本のインド洋での給油支援、PRT（地域復興チーム支援に反対し、軍事ではなく復興と平和の取り組みに力を入れるべきとした単独声明を出しました。それに引き続き、JVCを含む日本のNGO六団体で日本の主要政党に対して「軍事でない平和的なアプローチを望む」とした要望書を作成・提出し、自民党、民主

党、公明党も含む各党の国会議員とも意見交換を持ちました。現場を持つNGOとして、日本における政策議論がアフガニスタンの人々の現実からいかにかけ離れているかを感じているからです。

インド洋における日本の給油支援の事実、安倍元首相の辞任報道の際に一般のアフガニスタンの人びとに初めて知られるようになりました。「なんだ。日本もアメリカの仲間なのか」とがっかりした人が多かったそうです。アフガニスタン人にとっては、日本のNGOも日本政府も区別はなく同じ「日本」です。その意味で、私たちは当事者としてアフガニスタンに向き合うべきであり、先ほど述べた七月六日の事件においても、米軍だけではなく日本人である私自身も加害者であると思っています。

現在開催されている日本の国会では、インド洋での給油支援の延長などが議論されると予想されます。しかし、軍事支援を強化して逆に治安が悪化してきたアフガニスタンに、そして外国軍への感情が悪化している今、日本がインド洋ましてやアフガニスタン国内に自衛隊を派遣する意味はどこにあるのでしょうか？「自衛隊を派遣することが国際貢献だ」と言う人もいます。しかし、日本政府が国内に自衛隊を派遣する場合には、これ

までの経緯からおそらく極力安全な（逆に言えば軍隊を出さなくともいいような）地域を選択するでしょう。出したと言ふ事実がほしただけ、なのではないでしょうか。そのような自衛隊ではなく、日本のこれまでの平和的なイメージを活かし安全策を十分取りながら武装しないことで人々の信頼を得て実施する人道・復興支援こそ、日本政府はもっと力を入れるべきではないでしょうか。

アメリカのほうを見るのではなく、きちんとアフガニスタンそのものに目を向けるべきです。残念ながら今、軍事による解決策を国際社会は疑いもなく信じていますが、和平の模索はこれまでも数々なされていますし、そこで日本が果たせる役割は大きいはず。昨年十二月にジャラバード市内で県政府高官と支援調整をした際に、彼はこう言いました。「日本の支援は欧米諸国と違い、市民の巻き添えも多い軍事支援ではなく、復興に特化したアプローチだ。日本のプレゼンスは大きい」と、インド洋での支援が知れ渡った後でも、彼はこのように訴えたのです。

■NGOとJVCの関係

今年八月に、アフガニスタンにおいて日本のNGOペシャワール会スタッフである伊藤和也さんが

が拉致され殺害されるという痛ましい事件が起きました。現地の情報を十分把握した団体のスタッフでさえこういった事態を避けられなかったことを考えると、もちろん十分な安全対策はすべきですが、紛争地で行なう国際協力には命がけであるという事実を真摯に受け入れるべきでしょう。

しかし、これまで犠牲者を出している欧米のNGOでも活動停止したところはわずかで、今も大部分が活動を継続しています。支援のニーズを見ても、干ばつ・洪水・食料価格高騰などによる食料不足の深刻化があります。OXFAMの報告によると、女性と子ども百万人が極度の栄養失調で飢餓線上にありますし、我々の活動地でも多くの子どもたちは慢性的な栄養失調の状態にあります。

JVCも含めた二十七の国際NGOは、この九月に国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）代表宛に公式書簡を送り、支援調整や民間人被害、PRTの問題に対処するためにUNAMAの機能を強化するように求めました。あくまで軍事力によらない平和の可能性を模索するための一環としてです。JVCは現地アフガニスタンの人々の視点に立った支援／提言活動に、これまで以上に力を入れていきたいと思っています。

地域ぐるみの予防医療を目指して

JVCアフガニスタン保健アドバイザー

西 愛子



■プロフィール
五〇年生、鹿児島出身。七二年京都府立医科大学付属看護学院卒業。看護師、英語講師、会社員などを経た後、九二年よりJVCカンボジアに赴任。以後JICAカンボジア、JVCベトナム、JVC東京で勤務。〇七年より嘱託としてJVCアフガニスタン事業に関わる。

診療記録が語る人々の姿

ゴレーク診療所や村での出張診療で受診を待つ人々を写した写真を見ると、いつも胸がいたむ。幼児は日本で見かけるふつうらとして思わず抱きしめたいようなスベスベ肌の赤ちゃんではなく、やせて不機嫌な顔が多く、ブル力の下に隠れたお母さんたちもやせた弱々しい姿を想像させる。出張診療の記録を見ると、写真と重なる人々の姿が見えてくる。疲れやだるさを訴えて受診し、貧血と診断されている女性がとても多いのである。母親が健康でないと母乳も不足がちになり、子どもが栄養不良から不機嫌になったり病気になる。つまり母親はさらに疲れる、という悪循環に陥る。

診療記録からはさらに、虫刺されを含む皮膚疾患や、貧血、結膜炎などがとても多く、家庭における衛生改善の必要性が高いことがみてとれる。根本的な対策を行わずに症状改善のための薬を出すだけでは、同じような疾患で繰り返し来院するこ

ととなる。それはJVCにとって薬品代がかさむという単純なことではなく、受診者は苦痛の反復、来院のための時間と体力の浪費、労働機会の喪失、特に幼児にとつては医薬品による目に見えないさまざまな弊害などといった計り知れない負の影響が生じているのである。

厳しい環境

出張診療を行なっている村の一つであるクズカシコート村は、JVCが運営するゴレーク診療所から十キロ以上離れている。ここに住むヌールさんは聞き取り調査の中で、ゴレーク診療所に対する不満を述べている。「長い時間歩いてきて疲れているのに受付順番が遅いから長く待たされるのでも大変だ」。ヌールさんは二十二歳。十八歳の妻バヌーさんとの間に二人の子どまがいる。後述の健診の結果を見るとヌールさんもバヌーさんもBMI(体格評価指数)は十九前後でありとても細い。二人ともめまいがしたり体がだるいことが多く、子どもも下痢をすることが多いと訴えており、栄養不良がうかがえる。病弱の体で、あるいは幼児を抱いて炎天下の石ころ道を二時間も歩くのは耐え難い苦痛であろう。ヌールさんは「出張診療が始まってとても助かっている。それに関もなくこの村に簡易診療所ができるので本当にありがたい」と簡易診療所の開所を心待ちにしている。

ヌールさんは、二千平方メートル程の借地から取れる作物でほとんどの食料を得ているが、肉をたべることはめったになく、穀物と野菜のほかに、一頭の乳牛から搾る牛乳でつくるヨーグルトとチーズ、それに二羽の鶏が産む卵が週に一〜二個程度という。「土地がないのが一番の悩みだけど、この頃は治安も心配になってきた」と、将来への不安を語っている。

地域ぐるみの取り組みを

このような状況の改善に地域ぐるみで取り組むために、JVCは去る八月大きな活動を行なった。クズカシコート村において、住民のおよそ

現地事務所における

安全管理について

今年八月の伊藤和也さんの拉致殺害事件を受けて、JVCをはじめとしたアフガニスタンで活動する日本のNGOは急遽会合を持ち、それぞれの活動地の治安状況や今後の活動方針を共有しました。その後、ほとんどのNGOは、活動できる可能性がいかつ支援ニーズも高い現地からの撤退は考えておらず、安全管理を徹底することで活動を継続することを決めています。

アフガニスタンの治安はイラク戦争の開戦時(〇三年)から徐々に悪化しており、その都度JVCは組織としての安全管理を厳しくしてきました。現地における移動方法や活動実施の際の注意事項、緊急事態時の対応などを取りまとめて実施運営していますが、状況に合わせて見直しています。かつては活動地であるジャララバードへは隣国パキスタンのベシャワールから陸路移動していましたが、

アフガニスタン
より深く知るために――

十一月二十九日、 シンポジウム開催

JVCでは、十一月二十九日に都内においてアフガニスタンに関連するシンポジウムを開催します。アフガニスタン国内NGOネットワークの副代表、ノルウェーの国際NGOのアフガニスタン現地代表を招聘し、(財)日本エネルギー経済研究所の田中浩一郎氏、JVC谷山博史らとともに、日本も含めた国際社会がどのようにアフガニスタンに関わるべきかを議論するものです。その他十一月下旬にはアフガニスタンからの招聘者を囲むでの交流会や報告会を東京や横浜で開催する予定です。詳しい情報は、今後JVCホームページに掲載いたします。



■クズカシコート村で健康診断をするアフガニスタン人スタッフのファティマ(左)。



■クズカシコート村の出張診断で見かけた男児。頭部と腹部の虫刺され痕が化膿している。

■地域保健員の活躍

九月から村の女性たちを対象とし

半数を対象とした健康診断を実施したのである。村の人たちにまず自分たちの健康状態を知ってもらおうという試みであった。日本ではだれもが一度ならず経験している健診だが、アフガニスタンでは医療スタッフですら経験したことがないのである。電気もなく設備も資機材も非常に乏しい中で行なう初めての健診に、スタッフは準備段階からさまざまな難題に遭遇したようだが、彼らの頑張りを見た時、アフガニスタンの未来が明るく思えた。安全上の理由から日本人スタッフの現地駐在が不可能となり、今さらに短期訪問も難しくなっている。これからの大事な作業に住民や現地スタッフと直接対話ができないのは何となくもどかしい。

■平和の持続を

治療に忙殺されがちな日常に埋もれず、長期的な視野に立った予防医

た取り組みも開始した。これまで毎月JVCスタッフから研修を受けてきた地域保健員(Community Health Worker、以下CHW)^{※注①}が指導者となり、成人女性を対象に衛生や妊娠・出産、病気などについて定期的に学び合う場を提供する活動である。CHWは一定期間の研修を受けたうえで、基礎的な医薬品の処方や怪我の応急処置、予防接種など幅広い活動を無償で行なっており、前述の健診でも大きな力を発揮してくれた。人々にとってはすぐ近くにいていつでも助けてくれる大事な存在で、JVCもゴレーク診療所を拠点に十六カ所で活動する三十二名に対して研修や会議を行なって彼らの活動を支えている。

療への取り組みを進めるのがJVCの役割と考えているが、その根底には栄養改善というもっと大きな課題が横たわっている。どのような活動を行なうにしろ安定した平和が絶対条件であり、平和の崩壊はなんとしても避けなければならない。

JVC アフガニスタンの活動

JVCは2001年10月7日に開始された米英軍による空爆直後から、アフガニスタン東部(パキスタン国境付近)での国内避難民への食料や毛布の配布、医療支援を実施した。その後、アフガニスタンの復興に向けた「命を守る」、「人材を育てる」課題に取り組むために、アフガニスタン東部の農村で「女性と子どものための地域保健活動」と「女子教育支援(現在は教育支援)」を実施している。

■地域保健活動

8カ村27,000人をカバーする診療所を運営しながら、井戸建設による安全な水の供給及び地域保健員や伝統産婆の養成をし、診療所と連携した村レベルでの保健活動を進めている。

■教育支援活動

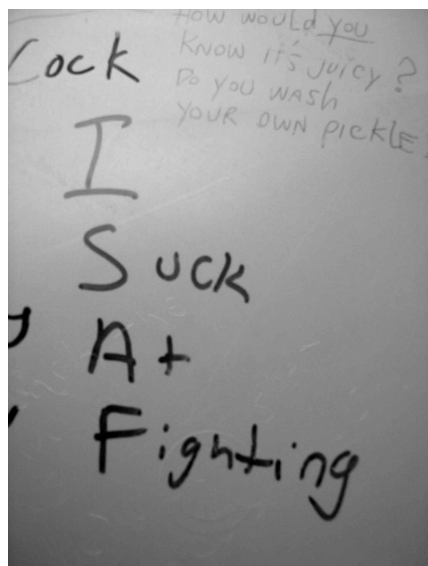
タリバーン時代に禁止されていた女子教育復興のため03年から女子学校建設等の支援を開始。06年からは教育の質向上のため教科書指導法研修を小学校教員対象に実施している。

■政策提言活動

9.11直後に発表した空爆反対声明以降、「対テロ戦争」がアフガニスタンの人々に及ぼす深刻な影響や軍による人道支援の問題を訴え、軍事・政治と切り離れた人道援助の必要性を提言している。

〇七年始めからは空路移動のみにする、という具合です。
JVCは、今年二月からは日本人の駐在を現地に置かず、アフガニスタン人スタッフを中心に現地の活動を運営しています。東京側から現地と毎日連絡を取り、治安や活動の進捗状況を確認しています。日本人の現場への出張も最小限にとどめており、今回の事件発生直後からは、これまで適用してきた安全対策を徹底するとともに、アフガニスタン人スタッフの安全を第一に考え、必要に応じた見直しを実施しています。

※注① CHWは、公衆衛生省(Ministry of Public Health)がBasic Package of Health Service(BPHS)という全国的な医療政策の一環として設けている制度で、100～150世帯ごとに村人のなかから男女各一名が選出される。



■米軍基地のトイレにあった落書き。ISAF（国際治安支援部隊）にひっかけて「I Suck At Fighting」（戦いにはうんざりだ）と書いてある。PRTはISAFの指揮下にある。



■米軍の支援によって完成した道路の完成式典に参加する現地PRT司令官（中央、迷彩服を着てターバンを巻いている）。左隣のサングラスの男性は地元の有力部族長。

アフガニスタンのPRTとはなにか

アジアプレス／ジャーナリスト（文・写真）

白川 徹
しらかわ とおる

■席巻するPRT

PRT（Provincial Reconstruction Team／地域復興チーム）は軍による復興支援チームだ。〇二年十一月に設立され、現在では二六のチームがアフガニスタンのほぼ全土で活動している。目的は治安維持ではなく、あくまでも現地の地方自治体やアフガニスタン政府を援助することだ。これには、学校や道路などのインフラ建設、現地住民への物的支援も含まれる。

〇八年三月、私は米軍のPRTを取材するために従軍した。米軍は主にアフガニスタン東部から南部にかけて布陣しており、私が従軍したのは東部コースト州に駐留する部隊だった。州都コースト・タウンで、米軍は学校や道路を建設していた。案内してくれた現地PRT司令官は、「一番重要なことはイスラム教や現地の文化を尊敬することだ」と言う。アフニスタン国民の生活が改善していることも強調した。

■「軍隊による支援」の現実

PRTの一環だと聞き、人道支援

チームに同行した。ヘリで連れて行かれた先は、パキスタン国境と山一つ隔てたスピロという地域だった。PRTというのだから戦闘とは無縁なのだろう、と思っていたが、部隊は物々しい雰囲気包まれていた。対戦車ライフルや迫撃砲を装備し、空からは戦闘ヘリが監視していた。彼らは歩兵中隊の攻撃部隊で、パキスタン国境を越えてくる武装勢力を阻止することが目的だ聞いた。七人程度の医者や獣医の「人道支援部隊」も同行していた。近隣の住民への医療支援を行なうという。

「人道支援部隊」は重武装した兵士らと共に民家を訪れた。家の主人は明らかに警戒していた。アフガニスタンの文化は無断でよそ者がコミュニティに入ることを許さない。しかし、強引に主人を説き伏せ、家の中に押し入った。しばらくすると、兵士は屋根の上にとったり、納屋を調べだした。まるで家宅捜索だ。主人の眼は明らかに怯えていた。武装した兵士がいきなり家に押し入ってきたのだ、断れば何をされるか分からないと考えたのではないだろうか。

■透けて見える異なる目的

家を出ると、武装兵士が家の若者を壁に並べていた。眼にカメラの様な機械を押し当てている。網膜パターンを記録し、アフガニスタン人のデータを作っているのだと兵士は話した。この網膜データを元に、武装勢力の分布を把握し、空爆対象を選定することがあるという。

部隊長に話を聞くと、人道支援の目的は、人心を獲得して敵を地域住民の中からあぶりだすことだという。前述の司令官はアフガニスタンの宗教や文化を尊敬すると言っていたが、実際の現場では彼の言葉が守られているとは言えない。

私が思うに、米軍のPRTは傲慢であり、立場を異にする人々への関心が無い。彼らの口にする「支援」とは、結局軍事作戦の手段でしかないのだと思う。

白川 徹 フロフィール

東京都出身。アジアプレス・インターナショナル所属。オーストラリア留学を経て〇六年からアフガニスタンを中心に取材を続ける。



■ PRT の支援を受ける主人とアフガニスタン人米兵（右の2名）。



■アフガニスタン人青年の網膜パターンを撮影する米兵。同様のことがイラクでも行なわれているという。

一進一退のなかで 紡ぐ日朝交流

코리아事業担当
寺西 澄子

建国六十周年を祝うための準備に
沸く、八月下旬の平壤。今年も『南
北 코리아 と日本のともだち展』の絵
画交流のため、東京にある朝鮮学校
の生徒やジャズピアニストの河野康
弘さんらとともに現地を訪れた。六
月末に米ブッシュ大統領が朝鮮民主
主義人民共和国（北朝鮮）のテロ指
定国家解除を議会に通告したことで
米朝関係に進展の兆しが見え、同時
に日本の経済制裁も見直しの議論が
進むかに見えたが、状況はまさに
膠着。日朝関係の悪化に道を閉ざさ
れた昨年に引き続き、今年も平壤市
ルンラ小学校での絵画展は実現でき
なかった。滞在最終日には「核無能
力化の中断を辞さない」とする朝鮮
外務省談話に接することになり、暗
い気持ちになった。

とはいうものの、平壤からの絵は
毎年日本に届き、多くのメッセー
ジを伝えてくれている。そのことを平
壤にも知らせようと小学校にプロ
ジェクターを持ち込み、東京での絵
画展や日本国内の巡回展の様子、日
本に住む子どもたちのビデオメッセー
ジ

などを紹介した。先生や子どもたち
からは、「私たちの伝えたい朝鮮の
子どもの明るい姿が、あちこちで紹
介されていてうれしい」、「これまで
に私たちの学校を訪問した人、絵を
送ってくれた皆さんのことは忘れら
れない」との声が聞かれた。さら
に、日本各地を巡っていた平壤の子
どもの等身大自画像が三年ぶりに里
帰り。モデルとなったルンラ小の卒
業生が三名も集まってくれた。日
本から訪問した李那優さんは三年前に
一緒に絵を描いたソン・ミソンさん
らと再会、お互いの成長に驚きつづ
もぎこちなさは全くなく、「那優は
ウリマル（朝鮮語）、ミソンは日本語
をもっと勉強する」と誓って別れた
という。

『ともだち展』に参加した平壤の
子どもたちがこのような時期にも、
「日本」のこと、絵画交流のことを心
に留めてくれていることは希望の光
だ。チャンギョン小学校では、河野
さんが会場にいた全員を巻き込んで
「ワッハッハ」の大合唱。日本からの
訪問者と朝鮮の人たちが心を通わせ
ようとする和やかな空気がそこには
あった。積み重ねの中で育つ平和の
芽があり、新たな出会いから生まれ
る平和の種がある。しかしこの貴重
な機会を共有できるのは、まだほん
のわずかだ。このチャンスをとれた
け多くの人と分かち合うにはどうす
べきなのか。課題は大きい。

「北朝鮮」って呼ばないで！

こうの やすひろ
ジャズピアニスト 河野 康弘

飛行機が平壤空港に近づくと美しい緑の大地が見えてきました。南の韓国の風景は日本の本州のようでしたが、こちらは北海道のイメージです。入国手続きをしてロビーに出ると朝鮮対外文化連絡協会（対文協）の皆さんが暖かく迎えてくださいました。板門店・開城市軍事境界線見学、小学校訪問、平壤市内観光、子どもたちの笑顔にいっぱい出会い、楽しく充実した5日間でした。

小学校訪問では、わたしもピアノを演奏。「台風」という曲でいろいろな奏法で演奏したら、子どもたちは目を丸くしていました。また「ワッハッハ」と皆で笑い、たくさん子どもたちが楽しそうにピアノに触れてくださいました。そして朝鮮の曲の楽譜をいただき、僕が伴奏して子どもたちが歌ってくれました。音楽は国境、言葉、人種を超えて人類が仲良くなれる神様からの贈り物ですね。

対文協の方とも、いろいろお話をしました。立場や歴史認識の違いなどがありますが、自国を愛して一生懸命生きていらっしゃるように感じました。その中で「北朝鮮と呼ばないでほしい」との話ができました。北朝鮮は地域名。国名ではありません。韓国は国名で呼んで朝鮮を地域名で呼ぶのはとても差別

的に聞こえるようです。そんなこと、思いもしなかったので驚きました。帰国してから、呼称について調べてみたら、わたしが無知だっただけで、数十年に渡って政府、マスコミで問題になっていたことがわかりました。いま使っている「北朝鮮」という呼称

は、拉致問題、核問題などを経ての挑発としての呼称のようにも思いました。「朝鮮」と呼んで欲しいとおっしゃっていたので、わたしは個人として「朝鮮」を使い、また、この話を伝えていこうと決めました。

国と国、というより、政府と政府によって個人が分断される仕組みに甘んじていては、いつまでも戦争の歴史が続きます。戦争や敵対感情から卒業した個人が増えることで国も変わっていきます。「北風」だけでは問題は解決できません。日本が太陽になる事を願っています。お隣の国と仲良くしたら軍隊はいりません。まずは「北朝鮮」って言うのをやめる事にしました。



■チャンギョン小学校でピアノを弾く河野さん。

12月1日は世界エイズデーですが、 JVC 南アは毎日がエイズデーです。

南アフリカ事務所
HIV/エイズ プロジェクト・マネージャー

水寄 僚子

世界の HIV/ エイズの状況 (07 年)

- ・ 3300 万人が HIV 陽性者として暮らす
- ・ うち 2/3 がサハラ砂漠以南のアフリカ諸国に住む
- ・ 200 万人が HIV/ エイズで亡くなった

南アフリカにおける HIV/ エイズの状況 (07 年)

- ・ 570 万人が HIV 陽性者として暮らす(世界最多)
- ・ 20～30 代の女性、30～40 代の男性の感染率が高い

出典：UNAIDS(国連エイズ合同計画)
2008 Report on the global AIDS epidemic

■世界エイズデーとは

毎年十二月一日は世界エイズデー

です。世界エイズデーは、HIV/エイズの感染予防、陽性者、エイズ患者に対する差別や偏見の解消と支援を目的に、八八年にWHO(世界保健機関)によって定められたもので、毎年テーマに沿って啓発キャンペーンが世界各地で繰り広げられています。今年は世界エイズデー制定から二十周年にあたり、さらなる啓発活動が行なわれます。

■祈り、追悼する人々

JVCの活動する南アフリカリンボポ州は、HIV感染率としては南ア国内九つの州の中で七番目とやや

低いですが、医療設備や人材の不足から、必要とされるケアの普及はなかなか進んでいません。

JVCの支援する地域のクリニックでも、〇七年にはエイズデーに合わせて、地域の陽性者グループが主催して啓発キャンペーンイベントが開催されました。集会では、HIV/エイズで亡くなった方を追悼する

キャンドルサービスが行なわれます。キャンドルに火を灯し、亡くなった方々のために祈る静かな時間、亡くなった方々の顔が思い出されて、胸が詰まる瞬間でした。また、地域保健局がエイズ予防の大切さ、治療に対する正しい認識を訴えたほか、近隣の中学校の演劇クラブの子どもたちと、陽性者グループの人たちがエイズに対する啓発劇をそれぞれの視点から披露し、HIV/エイズの予防啓発を訴えました。

南アフリカの農村地域で暮らす人たちにとって、周囲に自分がHIV陽性であることを知らせることは大変難しい選択です。多くの人が陽性であることを隠していることは、周囲の差

別や反応を考えるととても普通のことです。その中で、陽性者グループとして人前に出てイベントを主催し意識啓発を訴えることは、なかなかできることではありません。今回のキャンペーンでも、最初は興味を持って集まっても、人前に出ることがわかったとたんに参加を取りやめ方もいました。

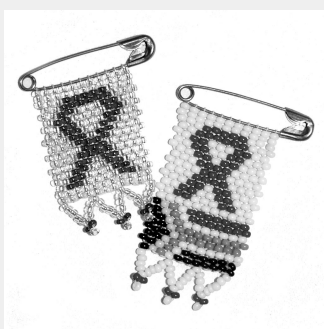
■「毎日がエイズデー」

今年、南ア政府、WHOとともに「南アフリカのHIV/エイズ感染は、一定の落ち着きを見せている。それも高い感染率での落ち着きである」と述べています。数字で何百万人と表されているものをみると、そんなものかと思いますが、実際にはその数字は常に入れ替わっています。今日統計に入っていた人が亡くなり、新しい人が統計に入ることが、目の前で起こります。エイズに関わるJVCの日々は「毎日がエイズデー」。地元の人たちと励ましあって、啓発を続けています。

日本国内でも、エイズデーに向けてチャリティーライブや勉強会などのさまざまなイベントが開催されまると思います。HIV/エイズの感染拡大防止や差別・偏見の解消のために何ができるのかを考えるきっかけとして、ぜひご参加ください。



■キャンドルサービスで祈るエイズデー集会参加者。(07年)



“HIV/エイズへの理解”を身につける。

レッドリボンは、HIV/エイズに対する理解とエイズで亡くなった方たちへの追悼を表すシンボルとして使われています。JVCでは、これを南アの伝統工芸のビーズでアレンジした「レッドリボン・バッジ」を販売しています。HIV陽性者の人たちが作るバッジを日本で販売することで、その人たちが収入を得ると同時に、遠くに住む人々が自分たちを支援してくれ、つながっているということが、身体的、精神的な悩みや苦痛を抱えることが多い陽性者の方々の励みと希望になっています。

バッジは1つ400円。ご注文は南アフリカ事業担当の渡辺が承ります。

スタッフのひとりごと

地元で人気のカフェ

カンボジア現地代表 山崎 勝



ブノンペン事務所の隣に、2軒のカフェがある。しかし、カフェというほど洒落たものではない。暗い店内は煙草の煙に包まれており、その霞の先ではカンボジア語吹替え版の香港映画が朝から大音量で流されている。

そんなカフェだが、うまいベトナムコーヒーが1杯30円くらいで飲める（カンボジアでは食堂の昼食が100円程度）。私も、出勤前にアイスコーヒーを頂くことにしている。周りを見渡すと、朝一番の稼ぎを握りしめたバイクタクシーの運転手が多

い。彼らの中には公安関係者もいるらしく、他には警官や軍人も目立つ。つまり、ここはインテリジェンスの最前線というわけだ。それ故か、ここで交わされる会話は幅広い。昨晚近所で起こった事件のことから世界情勢にまで話題が及び、それぞれ好き勝手なことを言っている。

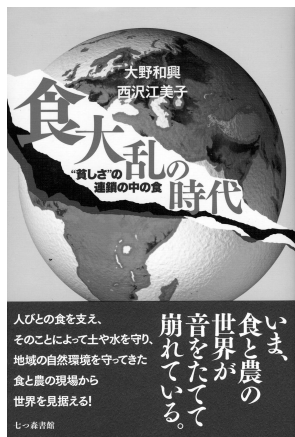
その中でも特に盛り上がるのがサッカーの話題だ。よくイギリスの名門チームの名前が飛び交うが、「オフサイド」の意味を知らない人も多い。しかし、それは大した問題ではな

い。なぜなら、彼らはサッカーくじを買っているだけだからだ。時には日本のチームの名前も耳にするが、何度聞いてもTOKYO、OSAKAばかり。知っている都市の名前をあげているだけで、要は大都市にあるチームは強いに違いない、ということなのだろう。確かに、バルセロナ、ローマと言えば名門チームだ。高度情報化社会とは言え、結局、判断し、決断するのは、私たち人間なのだろう。

『食大乱の時代 “貧しさ”の連鎖の中の食』

大野和興・西沢江美子 著／七つ森書館／1,800円＋税

みるよむきく



今年より農協がつけた値段はいいのですが、肥料代も燃料も上がっていますから、コメを売れば売れば赤字になるという状態は変わりません。それにして

今年より農協がつけた値段はいいのですが、肥料代も燃料も上がっていますから、コメを売れば売れば赤字になるという状態は変わりません。それにして

も、この本を読んで改めてえらい時代になったなあと思ったのですが、都会も大変なのですね。もう二十年位前になりますが、バブルと言われた時代、無農薬とか減農薬でつくったコメが十キロ七千円とか八千円で飛ぶように売れました。そのとき実は「こんな売り方でいいの」なんてチラツ

だか世の中全体が浮かれていた時代で、深くは考えませんでした。今、そんなコメが買える人はますます一握りになって、三食をまともに食べられない層が増えているのです。当然安いものしか買えない。わかっていても中国物に手が伸びるのはわかります。

ところが大野さんの本によると、その中国では日本の食品会社が農民を買い叩き、食品工場は農村からの出稼ぎ女性が低賃金でこき使われている。この本の副題の「貧しさの連鎖の中の食」の意味がわかりました。日本の農民も労働者も中国の農民も労働者もみんな貧乏になって、その貧乏が広がっている。誰がやっているのか、若いとき取り組んだ農民運動のことを思い出しながら、じっくり考えます。

(新潟・農業、七十六歳)

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善(CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部の35村で活動。今年は雨が少なく、9月に入っても田植えが行なわれていない地域がある。また、特に水が少ない田では雑草に悩まされるが、その解決のために、一部の農家が試験的にアイガモ農法を実践している。今のところアイガモは順調に育っている。

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や食糧確保を目指し、94年からカンダール県50村で活動している。10月からの新学期に向けて、環境教育担当の教員を対象とした4日間のワークショップを実施。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供している。バットバン刑務所内に設置した図書館の利用者からの要望で、野菜栽培に関する研修を実施。定期的に研修を行なうと欲しいとの要請があった。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を開始した。7月に新しい校舎への移転が完了し、工場での修理を再開した。10月からの新学期に向けて、入学試験の準備を進めている。(以上山崎)

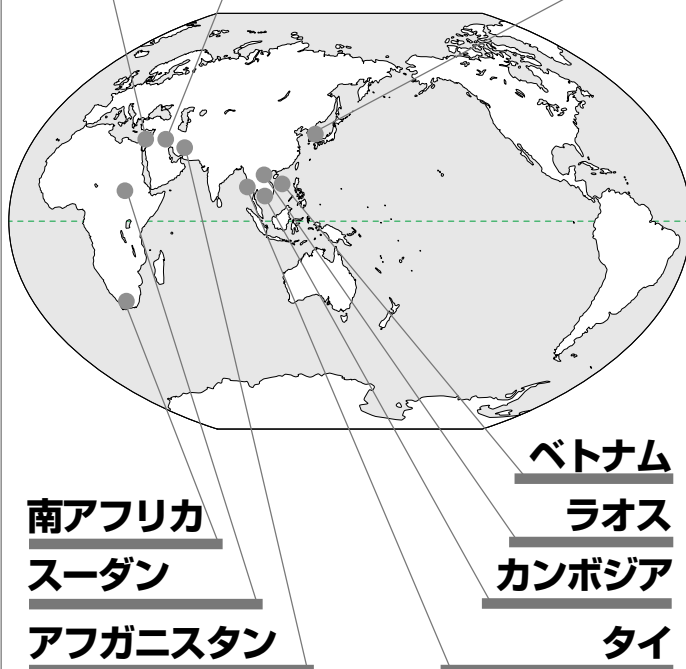


■環境教育ワークショップに7名の教員が参加。修了証が贈られた。

イラク

パレスチナ

コリア



ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ

南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

タイ

■農村派遣研修

タイの農村に滞在し「開発」について村人と考え・学ぶ研修プログラムを実施。7月にタイの有機農家に派遣された研修生は、それぞれの農家で田植えの手伝いをしている。研修生は慣れないタイ語を駆使しながら、村の生活の中で感じる不安や焦りから抜け出そうと試行錯誤の毎日を送っている。

■スタディーツアー

8月30日～9月7日、JVCが活動してきた東北タイを訪問するスタディーツアーを実施。コンケン県の地場の市場を見学した後、市場を運営する委員会メンバーと交流した。参加者からは「モノの支援ではなく農民同士が学び合える場を提供することがNGOの役目だと思う」といった声が聞かれた。(以上下田)



■「地場の市場」に参加する農家に派遣された研修生の宮田さん。

ラオス

■森林保全

生活の源である森林を守り、村の権利を確保する活動を行ってきた。7月に森林利用状況の把握作業を3村にて実施。8月には10村34名の森林ボランティアが集まり、経験を共有する交流会議を行なった。自家栽培の林産物(ラタン)の販売を学ぶため、2村11名が隣県を訪ねるスタディーツアーに参加。ゴム植林企業による補償問題がある村で、行政を交えて話し合いを重ねたが解決に至らず、県行政中心に取り組んでいく。カムアン県の事業は、予定通り9月に終了を迎える。



■SRI会議に他県から集まったNGOや村の人たち。

■複合農業・生活改善
事業終了を控え、フォローアップが中心。米の増収の成果が出ている幼苗一本植(SRI)農法の経験交流のため、行政官や他NGO、村人を招き8月に会議を行なった。現在、11村55世帯以上がSRI農法を実施しており、洪水の被害も心配されたが大きな問題はなく成長している。井戸の水を清潔に保つため、屋根の取り付けを完了した。コメ銀行では1村の継続が困難になり、元本の一部をJVCが引き取るようになった。(以上尾崎)

イラク

■ガン・白血病医療支援

不足している医薬品をJIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク。JVCもメンバー)として提供している。

引き続きバグダッド、バスラ、モスルの4つの病院に医薬品を支援した。JIM-NETとして7～8月で合計40,918ドル相当の支援を行なった。

■国内避難民支援

治安の悪化で約280万人の人々がイラク国内で避難生活を送っている。JVCは現地の団体と協力し、収入がないなど特に困難な状況にある家族を対象に、米と豆などの食料支援を行っている。7月に734世帯に配布した際の写真と受け取り者全員のサインが現地の協力団体から届き、無事に避難家族に配布されたことが確認された。9月1日、ヨルダンにおけるプロジェクト調整、新規活動調査として原文次郎が着任した。

■情報発信

9月11日に現地報告と座談会『9.11から7年～それでも対テロ戦争を続けるのか～』を開催。イラクの現状報告として、ヨルダンから原が電話インタビューに答えた。(以上谷山)



■ファルージャの避難家族に食料を配給した。

ベトナム

■農村開発

土壌流出防止と食料の安定的な確保を目指した活動をホアビン省にて実施。06年より3年の計画で、JVCスタッフが持続的農業と自然資源管理

に関する理解を深め、村人の生活改善のために具体的に貢献できるようになること、村人が傾斜地の利用や家庭菜園を改善していけるようになることを目指し、インドよりチャタジー氏を招聘して研修を実施してきた。最後の研修となる今回は、バクソン村とナムソン村の村人を対象とし、これまでの活動を振り返り、改善が必要な技術についての講義が中心となった。

■ネットワーク

8月31日より持続的農業・地域開発に関する事業を実施するインドシナ3カ国のJVCスタッフを対象とした研修がカンボジアで行なわれた。その際にカンボジアのNGO、CEDACを訪問。ベトナム人スタッフはCEDACが農民の食料確保に取り組みながら、マーケットへのアクセスを改善するために有機農産物を扱うレストランや小売店を経営し始めたことに感銘を受けていた。(以上伊能)



■チャタジー氏の講義を受けるナムソン村の村人たち。

スーダン

■車両整備を通じた難民帰還支援

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) との事業提携契約に基づき、「車両整備による難

民帰還支援事業」と、元難民の若者を対象にした「整備士研修による帰還民定着支援事業」の二本柱で活動を実施している。

JVC整備工場ではUNHCR車両の他に一般顧客の車両整備も行なっているが、最近はユニセフや国連人道援助支援室 (UNOCHA) などの国際機関、また多くの国際NGOが車両を持ち込むようになっており、一般車両の整備台数がUNHCR車両を上回る月も出てきた。受入車両の増加によって研修生の経験機会も増え、彼らの整備技術は著しく向上している。多くの研修生は昨年6月の研修開始時まで何の経験もなかったにも関わらず、今ではアシスタントメカニックとして工場の作業の中心である。実技だけでなく、学科についても12月の研修修了に向けて最終単元である「電装システム」の講義が日本人専門家によって開始された。「電装」は内容が難しいために希望者だけを対象に講義を行なうことにしたが、結果的には大半の研修生が希望して受講している。(今井)



■作業の合間に自習をする研修生。

南アフリカ

■環境保全型農業(東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。

8月にTOT(トレーナーのためのトレーニング)終了式を兼ねた8村の篤農家の集まりを持ち、地域で環境保全型農業普及に貢献してきた20人が表彰された。レベルスクルーフ村はTOT後の村人による普及が活発で、全世帯の1/3が有機野菜の栽培に取り組んでいる。急速に増えているトウモロコシの遺伝子組み換え種栽培の問題を考える農民会議を現地NGO「バイオウォッチ」と実施。(津山)

■HIV/エイズ(リンボボ州)

菜園研修および研修後のフォローアップを、在宅介護ケア・ボランティア10名、学童保育施設(ドロップインセンター)、07年度研修の修了者16人を対象に続けている。研修終了者は、村落内の学校や若者グループ、近隣の人に教え、有機野菜づくりを普及している。また、HIV陽性者と在宅ケア・ボランティアを対象にHIV/AIDS治療についての研修を実施した。HIV陽性者夫婦での研修参加や、昨年度の参加者が講師として活躍するなど、陽性者の積極的な参加が得られるようになっている。(水寄)



■カラ地区のTOT終了式で表彰を受けるンドダナさん。

パレスチナ

■健康教育・巡回診療支援

エルサレムの医療NGOによる保健教育・巡回診療活動を支援。夏休み期間中は学校・幼稚園や地域社会団体のサマーキャンプでの身体検査・救急法講習を中心に提供。9月は断食月のため、保健教育中心。(小林・福田)

■幼稚園児栄養改善支援(ガザ)

ガザの幼稚園児約550人への栄養改善支援。西岸ヘブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布。夏休み期間中はサマーキャンプを支援。8月末から新学年開始。ガザの栄養センターで栄養失調児に治療用栄養食を提供中。食料不足が続く中、毎月100人ほどの新規栄養失調児がセンターに通う。(小林)

■子どもの文化・教育支援

エルサレムのシュアファット難民キャンプの子どもセンター2カ所でサマーキャンプを支援。図画工作や運動など一カ月の活動に計270人の子どもたちが参加。(福田)

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプで女性グループの刺繍プロジェクトを支援。8月末にメンバー全員で今後の活動について協議した。(福田)

■アドボカシー／平和創造・平和構築

イスラエル・パレスチナの平和構築専門家や宗教家が集まる、平和教育ワークショップやスルハ(和解)大会に参加。東エルサレムの抱える問題をまとめた報告書を作成。東京での9月11日のイベントに現地パートナーと電話出演。(小林)



■ガザの栄養センターに通う親子。

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善のための地域保健事業

7月下旬から約2週間、活動の進捗状況を確認するために日本人保健アドバイザーが



■子どもの健康診断の様子。

日本人現地代表と共に現地を視察。めだった問題はなかったが、母親教室など若干計画の遅れが見られ計画の再確認をし、新規に採用した男女1名ずつの医師や助産師と話し合う場をもった。8月中旬には懸案だった診療所の外壁設置建設を村人の協力を得て開始した。また8月下旬には6日間かけてクズカシコート村の住民調査(健康診断など)を262人に対象に実施した(詳細報告は、本誌4～5ページを参照)。

■教育支援活動

JVC医療スタッフと協力し学校での健康教育を実施するため教育局や他団体が行なっている健康教育や教材について情報収集を行なった。

■政策提言・ネットワーク

8月26日に東部で発生した日本人NGOスタッフの拉致殺害事件をうけ、9月4日にDAYS JAPANなどが開催した緊急集会でアフガニスタンの現状を長谷部が報告した。9月16日民主党外交防衛部会でJVCを含むNGO7団体がアフガニスタンでの活動、社会情勢について報告した。(以上谷山由子)

調査研究・政策提言

■援助効果向上に関する意見交換会

援助効果向上のためのパリ宣言の中間レビューに関する閣僚級会合が9月にガーナで行なわれるのに先立ち、JANIC、TICAD市民社会フォーラム、ODA改革ネットが中心となってNGOと外務省とで意見交換を行なっている。その第2回目(7月18日)において、高橋が「NGOが考えるODAのアカウンタビリティのあり方」について問題提起を行なった。

■新JICAの環境ガイドラインの検討に係る有識者委員会

高橋が委員メンバーとして参加している。新環境社会配慮ガイドラインについて議論を行なった。論点及び提出資料並びに委員会議事録はJICAホームページで公開。

■円借款評価有識者委員会

第13回会合が7月29日に国際協力銀行本部で行なわれ、高橋が委員として参加した。過去の議事概要はJICAホームページで公開。(以上高橋)

コリア

■『南北コリアと日本のともだち展』(子ども絵画交流)

東京での『南北コリアと日本のともだち展』開催に引き



■元山にある江原道育児院の子どもたち。

続き、8月末に『ともだち展』実行委員と東京の朝鮮学校に通う子どもたちが平壤を訪問した。小学校での絵画展示は実現できなかったが、東京展に出品している平壤市内の2校で交流会を行なった。また、この訪問に同行したジャズピアニストの河野康弘さんが、チャンギョン小学校で演奏を披露した(詳細報告は、本誌8ページを参照)。

■昨年度水害被災支援先への再訪

昨年度に支援を行なった江原道元山市を「KOREA こどもキャンペーン」が訪れた。江原道人民委員会からは、昨年の洪水で農作物の成長が思わしくなかったのと同時に、世界的な食糧高騰のあおりを受け、穀物配給が以前の1/3にまで落ち込んでいるとの報告があった。ビスケットの支援をした江原道育児院では、粉ミルクの不足を豆乳で補っているために特に乳児の栄養状態が改善しないなど依然深刻な状況が聞かれた。(以上寺西)

NGOまつりに上野、 今年も好評でした。

カレンダーインターン

金子清佳

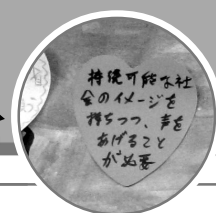


■つながりマップを説明する運営スタッフ。

JVCほかいくつものNGOが集まる丸幸ビルで、九月十四日に『NGOまつりin上野二〇〇八』が開催されました。連休の中という事で、お客さまが来てくださるか? というのが心配でしたが、そんな心配とは裏腹に、約二百二十名という大勢の方が足を運んでくださいました。今年のテーマは「EarthをもっとHappyに!」。共同企画として、世界で起こっている様々な問題が描かれた「つながりマップ」を用意し、各団体がそれらの問題にどのように取り組んでいるか、来場者自身が各団体を訪問しながら直接

国内ひろば

JVC network



パンフレットの余白に書き込み、最後にハート型のポストイットに「自分が問題に対してできること」を書いてマップに貼るといふ、初のオリエンテーリング企画を実施しました。

夕方からは『キャンドルナイト』を屋上で開催しました。キャンドルの灯る中、「児童買春はどいうやらなくなりませんか?」「NGOの意義とは?」など突っ込んだ質問も飛び出すなど熱い話し合いが繰り広げられ(時間も三十分延長!、大盛況のうちに幕を閉じました。今年はいらっしゃれなかった方も、ぜひ来年のNGOまつりを楽しみにしていただいね!

JVC コンサートが20歳の誕生日を迎えました!

JVC コンサート実行委員長: アイネス M. パスカビル

「なぜJVCのためにコンサートをするのか?」——良い質問です。公演を始めて20年目(大阪15年)の今、様々な思いが心の中にうかんできます。

このコンサートは、ボランティアの皆さんが各々の能力、時間、リソースを使うよう促すもの。長時間練習を行なう歌声ボランティアがいれば、趣旨に賛同して出演する演奏者や指揮者もいます。公演のために時間をいとわず働くJVCコンサート実行委員会、JVCスタッフ。ここには「日本国際ボランティアセンター」の「ボランティア」が反映されています。

また、このコンサートには、世界の一体性、JVCの活動の国際性、出演者の多彩な出身国(ヨーロッパ、ロシア、米国)、バッハやヘンデルという音楽が持つ地球規模での影響を考えるとという目的もあります。「日本国際ボランティアセンター」の「国際」の精神です。

また、来場者を楽しませることもコンサートの目指すところです。すばらしい音楽を日本の来場者に届けるため、合唱団、テレマン室内管弦楽団、名声の高い指揮者、独唱者と力を合わせます。ここに「日本国際ボランティアセンター」の「日本」が反映されています。

そして、このコンサートはJVCの活動資金をつくるものでもあります。1989年以来、企業・団体からの寄付、チケット販売により累計2億円を超す収益をあげてきました。

そして最後に、私にとって一番大切なこと、それは、このコンサートが、スーダンの帰還難民でJVC整備工場で整備士になる研修を受けているモモ少年や、JVC南アフリカの自然農業の活動に参加するカリピおばあちゃん、カンボジアで、JVCが支援する貧しい母子をケアするセンターで働いているニム医師といった人たちのために開催されてきたということ。JVCのボランティア精神、国際的なビジョン、クラシック音楽の演奏、募金活動が現場で一体となり、過酷な戦争や飢餓を強いられた人たちが、再び自信を取り戻し人間らしい生活に戻るための助けとなるのです。1989年初回のロシア人指揮者ショスタコビッチ氏から今年のノルウェー人指揮者ハウゲ氏に至る指揮者諸氏、JVC支援者の皆さん、現場の人たち、それを支えるJVC...、このような人たちがいるからこそコンサートが行なわれるのです。ありがとうございます!



JVC 国際協力 コンサート

20年前、1人のボランティアがまいた「音楽で国際協力を!」の種は、お金だけでなく、JVCの支援者を増やし、存在を伝えることに貢献してきました。

平和主義の国、ノルウェーより指揮者をお招きし、バッハ、ヘンデルのオラトリオを演奏します。東京20周年・大阪15周年の記念の今年、ぜひご来場ください。

第15回大阪公演

バッハ『クリスマス・オラトリオ』

2008年12月6日(土) 16時開演
いずみホール

第20回東京公演

ヘンデル『メサイア』

2008年12月13日(土) 15時開演
昭和女子大学人見記念講堂

チケット申込み、お問合せ:
JVC コンサート事務局(石川)
E-mail: tomoko@ngo-jvc.net
TEL: 03-3836-4108 / FAX: 03-3835-0519

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先
をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

7月計 1,229,717 円

8月計 1,059,604 円

	7月	8月
無指定	432,797円	92,914円
タイ	3,000円	12,150円
カンボジア	39,500円	15,150円
ラオス	14,000円	22,150円
ベトナム	50,000円	0円
南アフリカ	58,000円	0円
パレスチナ	499,920円	604,040円
アフガニスタン	59,000円	90,500円
コリア	0円	0円
イラク	73,500円	22,700円
スーダン	0円	200,000円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 155,500 円 / 20 件

8月計 83,946 円 / 16 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からやクレジットカードで
自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

7月計 1,758,150 円 / 1,490 件

8月計 1,794,350 円 / 1,505 件

編集後記

たまに明け方早く起きて外に出ると、
「空が高くなったなあ」と感じられるとき
がある(「もう10月だから」という頭があ
るからそう感じるのかも知れないが)。

都心に暮らしセコセコ生きている中では
こうしたふと季節を感じられる瞬間、この
国に生まれてきてよかったな、としみじみ
思う。自分を育ててくれたこの国の風土や
文化をきちんと振り返らなきゃ、と思いつ
つ、今日も無機質な地下鉄で出勤中…。(H)

新スタッフ紹介

稲見 由美子
いみ ゆみこ

経理担当



「ボランティアなんて一生関係ない」と思っていた私が、JVCと出会って早二十年。数年のボランティア活動後、ベトナム・ハイフォン市で三年、東京事務所二年勤務し、出産を機に退職。怒ったり泣いたり笑ったりの子育ても一段落？し、仕事を探しはじめた矢先にJVC経理担当募集記事を発見。「ご縁」がまだ繋がっていたように、古巣に復帰することができました。

ベトナムでは「家族みんなで食卓を囲む」ことのすばらしさを知り、長く続いた戦争の傷跡は数十年経っても人々を苦しめ続けることを痛感。経理の仕事をしつかりと担い、紛争や貧困に苦しむ子どもたちに一日でも早く平和な世界が来ることに貢献したいです。

島村 昌浩
しまむら まさひろ

カンボジア事業担当



JVCとの関わりは、九〇年に高校時代の仲間がJVCのスタッフとなったことから始まります。その友人の勧めで市民団体を母体としたインドシナ地域専門の旅行会社に転職してJVCを担当しつつ、自らスタディーツアーにも参加しました。その後旅行会社の現地駐在員としてプノンペンで二年間を過ごし、清水さんや馬さんを始めとした当時のJVCカンボジアスタッフの皆さんから、たくさんの方とを学ばせていただきました。

退職後に開発分野を大学院で学び、〇二年から青年海外協力隊としてエチオピアに。帰国後は医療系NGOで活動しました。現場で働くスタッフの円滑に活動を進めるための環境づくりが私の使命だと思っています。

グレン・ハント

ラオス森林担当



オーストラリア出身ですが、中学から大学まで日本語を勉強してきて、日本に三年間住んでいたこともあり、ます。軽自動車で網走から鹿児島まで日本を一周し、その間に淡路島のタマネギ畑でアルバイトしたことが懐かしい思い出です。日本の旅行についてなら、何でも聞いてください。

大学院博士課程ではラオスの森林について研究をしてきました。ラオスに来てからすでに四年半が経ちましたが、その間、ボランティアや調査研究担当としてJVCと一緒に活動をしてきました。新しい共有林プロジェクトの担当となり、これからもJVCと一緒に、村人の生活にとって大切な森林を守っていききたいと思っています。

平野 将人
ひらの まさひと

ラオス現地代表



以前カンボジアにいた際に、現地代表の山崎さん、前代表の米倉さんらと交流があったことがJVCとの出会いでした。国際協力とは縁のない会社員生活からの転身であり、なにかとお世話になりました。

ラオスでは、仕事に全力を尽くすことは当然ですが、家庭菜園などにも挑戦するつもりです。以前は企業人としての成功しか頭になく、食糧は金銭との交換で得るものとしか考えていなかったため、自分の変化に驚きつつ楽しんでいます。会員の皆さんのご支援がどう活かされているのか、明確に理解いただけるよう率直でわかりやすい情報発信を行ない、疑問に思った点などをどんどんご指摘いただければと考えています。

会員専用ページパスワード (11~12月) →→→ Y7v2hgmt79

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を！

JVC CALENDAR 2009

風のささやき

写真 白川 由紀
Photographs by Yuki Shirakawa



JVC
Japan International Volunteer Center
特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

収益は国際協力に役立てられます

JVC 国際協力カレンダー 2009

『風のささやき』



今年も卓上型あります。

2009年のカレンダーのタイトルは『風のささやき』。詩のような写真14枚が綴られています。朝焼けの浜辺、菜の花畑を行く、砂丘で遊ぶ子どもたち…。日常なのにキラリと光る瞬間の数々。ご協力いただいたフォトエッセイスト白川由紀さんは、以前からのJVCの支援者。今回うれしい協働となりました。卓上カレンダーは台紙を黒いボード紙にすることで、おしゃれで使いやすくなりました。壁掛け型、卓上型、あわせてご利用ください。

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (10月3日現在) 合計 1,336人
(正会員 638人 賛助会員 698人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。

